

札幌の空を見つめる

札幌管区気象台

天気は、いつの時代も人々の関心事だったので、
はないでしょうか。この毎日の天気を予報してく
れる札幌管区気象台を紹介します。

札幌管区気象台の歴史は、開拓時代にさかのぼり
ます。明治四年（一八七一年）、北海道開拓使の顧問
団としてアメリカから招かれたケブロンらは、北海
道踏査の報告書の中で、北海道開拓に望みがあるこ
とを建言しました。この報告に基づいて九年（一
八七六年）、札幌農学校（現在の北海道大学）が誕
生。この時、クラーク博士とともに来札したのが、
当時二十代の若者だったウイリアム・ホイラーで
した。

ケブロンらの報告の中で、開拓には気象観測が重要
であるとされたことから、ホイラーは農学校で教
壇に立つかたわら、同校教師館として使われていた
札幌区東創成通りの開拓使旧本陣（現在の南二東一）
で気象観測を始めました。九年（一八七六年）九月



明治23年ころの札幌測候所（現在の北8条西9丁目付近）
（札幌管区気象台所蔵）

一日のことです。当時は午前七時、午後二時、午後
九時の一日三回、気圧、気温、湿度などの観測が行
われ、ホイラーは、その管理者を約一年半務めて
います。

その後、観測所は移転を繰り返し、昭和十四年、四度目の移転で現在の場所（北二西一八）に落ち着きました。そしてこの時に、名称も札幌測候所から、札幌管区気象台に変更されたのです。



現在の札幌管区気象台

ホイーラーが始めた気象観測は、函館、東京に続き、日本で三番目に行われたものでした。そして、その観測結果をもとに天候を予測し、住民に知らせるといふ試みが札幌で行われたのは、十三年（一八八〇年）のことです。当時は通信手段が発達していなかったため、南二西五に三角の旗を掲げて知らせました。この試みは、風雪が激しい北海道での必要性が高かったことが背景にあり、十七年（一八八四年）から始まった全国的な天気予報業務に先駆けて行われたものでした。

昭和に入ると、札幌でも高層気象観測（十五年）や気象レーダーの設置（三十八年）が行われ、より精度の高い予報が可能になりました。特に五十年代の発展は目覚ましく、静止気象衛星ひまわりや地域気象観測網（アメダス）が登場したのもこのころです。

三十八年に火事に遭ったため、翌年建て替えられ札幌管区気象台の建物は、今も健在です。外観は古くても観測機器は最新で、札幌の空を見つめてきた経験と知性を感じさせます。

（平成十年二月号・第四十三回）